

アーツ&クラフツ運動史国際会議+セツルメント 運動史国際会議出席に関する報告

森 俊 夫

I. はじめに

冒頭の二つの会議は、当初、アーツ・アンド・クラフツ&セツルメント運動史国際会議（The International Conference on the History of the Arts & Crafts Movement and the History of the Settlement Movement）の名のもとに一つの会議として開催されていた。それが、二つの連続した会議、アーツ&クラフツ運動史国際会議+セツルメント運動史国際会議（The International Conference on the History of the Arts & Crafts Movement and The International Conference on the History of the Settlement movement）として日程を分けて開催されるようになったのは、2004年の第4回、ロンドン、トインビー・ホールでの開催からである。また、この会議の発祥は、シカゴにおける別の国際会議で大阪大学大学院教授藤田治彦氏、トインビー・ホール館長（当時）ルーク・ゲーガン氏、イリノイ大学シカゴ校ジェーン・アダムス・ハル・ハウス博物館館長（当時）ペグ・ストローベル氏の三氏の出会いからだと聞いている。

私は、意匠学会からの情報で2003年、横浜・大阪で開催された第3回目の会議に初めて出席し、その後、2008年まで2006年（韓国）を除いて毎年出席している。会議出席に当たって、京都文教大学海外出張助成金を2004年（英国・ロンドン）、2007年（フィンランド・ヘルシンキ）、2008年

（オランダ・ライデン）の三度に渡って得ることができた。そのため、この報告書はその三度の経過を中心に作成されている。また、2007年のヘルシンキで開催された会議では、「Contemporary Art in the Countryside of Japan—A Case Study of the Echigo-Tsumari Art Triennial—」と題して発表をした。その発表レジュメは報告書の最後に参考資料として掲載させて頂いた。

II. 国際会議開催の趣旨・目的

この国際会議開催の趣旨や目的については、その都度微妙に書き換えられているが、以下の説明がわかりやすいと思われるのでここに掲載した。

デザインや工芸を中心とした「アーツ・アンド・クラフツ運動」と地域社会福祉の「セツルメント運動」はその初期から密接な関係にあった。「セツルメント運動」発祥の地ロンドンのトインビー・ホールは「アーツ・アンド・クラフツ運動」の一翼を担った手工作ギルド創設の地であり、その影響下シカゴに開設されたセツルメント、ハル・ハウスはアメリカにおける「アーツ・アンド・クラフツ運動」の拠点の一つであった。この二つの運動が世界に広がった19世紀末から20世紀初頭にかけての数十年は、文化活動、仕事、生活などの理想的な関係を総合的に考

えようとした人々がさまざまな試みを行なった興味深い時代である。世界各地でそれら二つの運動が繰り広げられた土地や、類似の理想を追究した人々の活動の場所を互いに訪問し合い、知見を披露し、経験を語り合うことを通じて、現代の芸術、文化、社会、家庭などの相互関係を見直そうというのがこの国際会議の趣旨である。芸術と社会、そして芸術家と社会事業家あるいはボランティア活動家の「インターフェイス」会議である。(第4回ロンドン国際会議趣旨説明より)

III. 参加の目的

この国際会議への参加の目的は、現代社会におけるアートの役割やマネジメントを歴史的視点から、また、グローバルな視点から捉えなおすことにある。私は、本学、現代社会学科の開設にともない、科目「現代社会とアート」「アート・マネジメント論」を担当することになったが、現代社会を過去の社会から未来社会への通過点と考えた時、歴史的視点とグローバルな視点は現代社会とアートの関係を捉える上で最も重要な事柄であると考えている。アルビン・トフラーの著書『第三の波』から言葉を借りれば、アーツ・アンド・クラフツ運動とセツルメント運動は、トフラーが第二の波と指摘する工業化社会が農耕社会から脱皮する過程での困難を解決するために生まれた社会運動と捉えることができる。換言すれば、ギルドなどによる手工業的生産中心社会から産業革命による工業的生産中心社会へと転換する過程での軋轢から生まれた幾多の社会問題を解決する手段として起こった社会改革運動と言うことである。それに対して現代をトフラーの言う脱工業化社会と捉える時、第三の波、つまり、工業的生産中心社会から脱工業中心社会への転換点と捉えることができる。第二の波、

産業革命に対して、第三の波、‘現代’を情報革命と捉える論者もいる。アーツ・アンド・クラフツ運動は、芸術と生活に関する運動であり、セツルメント運動は、貧困層救済の運動で一見かかわりのない運動のように見えるが、実は、深いかかわりを持って存在したことがわかっている。この二つの運動が顕著であった19世紀後半から20世紀初頭についてアートと社会の関係を、当時の歴史的、グローバル的視点から捉えることは現代のアートと社会の関係を考察する上で意義深いと考える。

IV. 京都文教大学海外出張助成金により出席した会議とその概要

1. 第4回アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議&第1回セツルメント運動史国際会議

主催：

トインビー・ホール (ロンドン)

共催：

大阪大学21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」、イリノイ大学シカゴ校ジェイン・アダムズ・ハル・ハウス博物館

日程：

2004年7月26日～31日

経過：

この会議は、芸術と社会、そして芸術家と社会事業家あるいはボランティア活動家の「インターフェイス」会議として開催された。「アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議」と「セツルメント運動史国際会議」への分離は、更なる発展を目指して明確に二分しながらも連続日程で開催することによって、これら表裏一体の運動とその研究の更なる充実を図るためであると主催者側の趣旨説明があった。

その結果、COE「インターフェイスの人文科学」が共催する「アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議」に引き続き、「セツルメント運動史国際会議」は7月29日から31日の日程で同じ会場で開催された。

7月26日

アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議（レイトン・ハウス・アート ギャラリー、デュ・モーガン センターを訪問して現地で会議）

7月27日

アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議（シェルテナム・アート・ギャラリー、ロッドマートン・マナーを訪問して現地で会議）

7月28日

アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議（ウィリアム・モリスのレッド・ハウス、スタンデン、プレミア・アーツ&クラフツホームを訪問して現地で会議）

7月29日～31日

セツルメント運動史国際会議（於；トインビー・ホール）

研究、調査、発表等の概要：

これに先立って、私は、“英国現代社会とアート”の関係について研究調査をしている。調査内容は、主に“英国社会とコンテンポラリー・アートの関係”であったが、その一部は2003年度京都文教短期大学研究紀要に研究ノート「ポスト・モダンのアート」として発表した。この研究課題は、1998年度文化庁派遣芸術家在外研修員としてロンドン大学ゴールドスミス・カレッジに滞在して以来の研究課題であり、その後、2002年、2003年にそれぞれ研究調査のためロンドンを訪れている。

現代の英国社会とアートの関係について研究調査するうちに興味を持ったのが、

19世紀末から20世紀初頭にかけての社会改革運動、アーツ・アンド・クラフツ運動とセツルメント運動である。現代の英国社会とアートの関係を深く知ろうとするとき、必要な事柄の一つは、それが現在に到った経過である。その点で19世紀末から20世紀初頭の英国社会を学ぶことは意義深いと考える。

この第4回アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議&第1回セツルメント運動史国際会議は、前年に続き二度目の参加であった。また、会場となったトインビー・ホールには、前年、2003年12月、単独で訪問、館長ゲーガン氏とお会いして研究に必要なトインビー・ホールに関する資料等をいただいた。

アーツ・アンド・クラフツ運動やセツルメント運動の歴史的視点からの研究発表に加えて、ウィリアム・モリスや運動発祥の地を実際に訪れるツアーも組まれていて実証的調査ができた。現場を実際に訪問でき、資料としてビデオなどに収めたことは、今後の研究発展に大いに役立つものであった。また、この研究を継続していく上でアメリカをはじめヨーロッパ、アジア、アフリカ地域からの参加者とも接し議論することも研究継続に有意義であったと確信している。

今回、国際会議参加の前に二日間の予備日をもうけ、単独行動を行ったが、これは、今回の国際会議に先立ってのトインビー・ホール館長であるゲーガン氏への訪問、ロンドン在住の元原美術館（東京）学芸員、光山清子氏（英国在住のフリーランス・リサーチャー）、ダイワ・アングロ・ジャパニーズ・ファンデーション（大和證券の英国における企業メセナ活動の拠点）ディレクター、河村知子氏と面会して現代英国コンテンポラリー・アートの現状等を尋ねること、及びこの時期のコンテンポラリーアート・ギャラリー（ICA、ヘイワード・ギャラリー

ー、ホワイトチャペル・アート・ギャラリー)を実際に訪問するためであった。100年前のロンドンと現在のロンドンにおける社会とアートの関係の比較考察を得るためである。

“アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議”と“セツルメント運動史国際会議”は、連続する二つの国際会議としてそれぞれ3日間続きで合計6日間行われた。“アーツ&クラフツ運動史国際会議+セツルメント運動史国際会議”として昨年度まで四日間の日程で行っていたものをトインビー・ホール創立120周年記念として二つに分けて六日間行ったため、セツルメント運動史国際会議は参加者が増えたものの、アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議は、小規模なものとなった。アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議はそのため、ツアー形式のものにレクチャーと発表を加える形に変更されたが、それでもトインビー・ホール館長、ハルハウス博物館館長、カナダ(トロント)からの代表者、ロンドン在住の歴史研究者なども同行して有意義な議論が交わされた。また、現地では、訪問したミュージアムやホールの学芸員が加わったかたちで説明や議論が行われたために、現地での臨場感もあって、具体的な学習機会やコミュニケーションの場となって、さらに知見が深まることとなった。

後半のセツルメント運動史会議では、各国のスピーカーの積極的な発表と活発な議論がおこなわれ運動史としてだけでなく今後のセツルメント運動のあり方にまで議論が及んだ。また、『EAST END 1888』(写真1)の著者であり、19世紀末のロンドン社会研究の第一人者として知られているウィリアム・J・フィッシュマン氏とお会いできたこと、トインビー・ホールで創立120周年を記念した晩餐会と記念撮影(写真2)にまで参加で

EAST END 1888

William J. Fishman



(写真1) ウィリアム・J・フィッシュマン著
『EAST END 1888』



(写真2) トインビー・ホールにて

120年前の開館時に撮影された記念写真を真似てゲラン館長を中心に記念撮影

きたことは、貴重な体験であったと考えている。

それにしても、19世紀末のまだ交通通信手段の十分でない時代にこのトインビー・ホールを基点として、短期間に次々と全世界にセツルメント運動が伝播していったこと、そしてセツルメント運動は現在も生き続けていることに驚きを覚えた。また、議論の中で現代の西欧社会におけるアートの役割と日本社会におけるアートの役割の微妙な違いに気づかされて新たな研究課題を得ることができた。

第5回は翌年、岡山県倉敷市で四日間の日程で行われることが発表された。日本における社会運動史とアートの関係から大原孫三郎とその周辺のことからが中心の議題となることが大阪大学大学院教授、藤田治彦氏から紹介された。(本来、順序からいくとシカゴのハルハウス博物館とロックフォード・カレッジの主催となるはずであったが、事情から第6回(予定)に変更となった。ハルハウス博物館はノーベル平和賞受賞者ジェイン・アダムスの活躍の場であり、ロックフォード・カレッジは彼女の出身校である。このカレッジからは、今回、学長が参加していた。)

2. 第7回アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議&第4回セツルメント運動史国際会議

主催：フィンランド・セツルメント・協会
(Finnish Federation of Settlement)
日程：2007年9月10日～13日

経過：

9月10日；会場は、ホテル・クムルス・オリンピック内にあるセツルメント事務所内の会議室。午前中、フィンランド・セツルメント協会代表ペンティ・ルメチネン(Pentti Lemmetyinen)氏の挨拶、今回の国際会議議長ルーク・ゲーガン氏開会挨拶の後、主な参加者の自己紹介。その後、ヘルシンキ美術デザイン大学教授ペッカ・コルヴェンマー(Pekka Korvenmaa)教授のフィンランドの建築を中心としたデザイン史の講演、質疑応答があった。午後はチャーター・バスにて郊外の民族ロマン主義による歴史的建造物ヴィトレスク(Hvittrask)を見学。

9月11日；午前中、ペッカ・コルヴェンマー教授の案内で、ヘルシンキ市内の19

世紀末から20世紀初頭にかけての歴史的建築物を見学。午後、慶応大学横山千晶教授と私のレクチャーの後、質疑応答があった。横山教授の講演タイトルは、「The Japanese Forkcrafts (Mingei) Movement and the education of factory workers」、私は、「Contemporary Art in the countryside of Japan-A case study of the Echigo-Tsumari Art Triennial」であった。夜は、夕食を囲みながら意見交換が行われた。

9月12日；コーヒーブレイクの後、ロンドン在住のケイト・ブラッドリー(Kate Bradley)博士のレクチャー「Children, Young People and settlements」を米国、ジェーン・アダムス・ハル・ハウス博物館ペグ・ストローベル前館長が代読した。(ケイト・ブラッドリー博士は、都合で出席できず。ただし、質疑応答は、電話を使って行われた。)その後、レクチャーとしてフィンランド、タンペレ大学教授、イレヌ・ラバイネン(Irene Roivainen)氏の「settlements and Youth」、日本福祉大学教授、永岡正巳教授の「History of the settlement Movement in Japan」、オーストラリアの近隣センター理事長、マギ・マルコ・アイジック(Mag. Marko Iljic)氏の「Facing the Future」と発表が行われ、それぞれの国のセツルメント運動の歴史的展開、現状と将来についての活発な討議が行われた。夜は、郊外のセツルメントハウスに場を移してフィンランド料理の会食とセツルメントの人々による民俗音楽やダンスが披露された。

9月13日；朝からバスで郊外にあるルーラ・セツルメント・ハウス(Louhela Settlement House)、障害児センター、デイケア・センターなどを訪問。移民の問題、障害者福祉、家庭内暴力などこの国が抱えている問題点が明らかになった。午後はヘルシンキに戻りカリオラ・セツ

ルメント・ハウス (Kalliora Settlement House) (写真3) で以下の方々のレクチャーが行われた。大阪大学大学院教授藤田治彦氏、シカゴ、ジェーン・アダムス・ハルハウス博物館前館長 (イリノイ州立大学名誉教授) ペグ・ストローベル氏、トインビー・ホール館長ルーク・ゲーガン氏、フィンランド、タンペレ大学教授、イレヌ・ラバイネン (Irene Roivainen)。

9月14日；午前中は自由時間につき、一人でノキア工場跡地にできた芸術文化施設カアペリ (写真4) を訪問。マネージング・ディレクター、スチューバ・ニクラ (Stuba Nikula) 氏の案内で施設を見学。午後は、ペグ・ストローベル氏、ルーク・ゲーガン氏とともに建築家アルバ・アアルトの自宅及びスタジオを訪問。その後、ルーク・ゲーガン氏と二人でヘルシンキ現代美術館、キアズマにて展覧会を見学。

9月15日；午前中、ヘルシンキ中央駅近辺のアテネウム美術館を一人で訪問。フィンランドの1750年代から1960年代のフィンランド美術の流れを知る。午後、空港へ向かいヘルシンキを後にする。

研究・調査・発表等の概要：

- (1) 19世紀から20世紀中葉にかけてのフィンランドの文化、政治の様子を知ること



(写真3) カリオラ・セツルメント・ハウスにて

ができた。特に、建築における民族ロマン主義の高揚は、国の政治的独立とも精神的に深く関わっていることが理解できた。

- (2) セツルメントに関しては、現在でも30を越すセツルメントがフィンランド全土にあって福祉に重要な役目を果たしていることを実感した。今日、セツルメントの役割として、移民の社会への同化の援助、家庭内暴力への対応、若者の教育、障害者援助、地域福祉など多岐にわたっていることがわかった。また、日本では、セツルメントというと過去の経過から政治的な臭いがするが、この国では国の政策と密接に結びついていると思われた。日本、英国、アメリカ合衆国、オーストリア、オランダ、フィンランドとその歴史的展開によって福祉に関する政策のあり方の違いや芸術文化と福祉の関係が微妙に異なっていることを実感した。発表されたレジメ等をもとにこれからその差異について検討したい。

- (3) 私は、今回、「日本の田舎とコンテンポラリー・アート―越後妻有アート・トリエンナーレを事例として―」と題してレクチャーをした。この芸術祭典は、過疎地の福祉と地域振興策として行われ、現在、日本で大変注目されている。アー



(写真4) 芸術文化施設カアペリ(ノキア工場跡地)

ツ&クラフツ運動やセツルメント運動は、19世紀から20世紀初頭にかけての工業化社会へ突入する段階での社会問題を解決する方法として取られた運動と考えられるが、脱工業化社会ともいえる現在、21世紀において人々がより豊かな生活を得る一つの手段として、社会におけるアートの役割の新たな試みとして取り上げた。21世紀は、金融と文化芸術が社会の主役となると予言する未来学者もいる。アートと社会の新たな関係の構築については、欧米では様々な試みが行われている。会議終了後、フィンランド最大の通信機器メーカー、ノキアの古いケーブル工場跡を訪問したが、このビルを市が買い上げて第3セクター文化施設「カアペリ」として運営されていることは有名である。ヨーロッパ各地で20世紀の産業遺構ともいえる古い工場跡地を文化芸術の施設に転換して町を活性化させる試みが行われているが、フィンランドは、このような点でも先進地である。将来のヨーロッパ文化を構築するためにと題して、トランス・ヨーロッパ・ホールズ (Trans Europe Halls) という協会が設立されて約30の団体が参加して共同で情報を発信しているが、このカアペリもその主要なメンバーである。ヨーロッパの文化政策についても肌で感じる事ができたのは幸いであった。

3. 第8回アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議&第5回セツルメント運動史国際会議

主催：ライデン・フォルクスハウス
(Leidse Volkshuis, Leidse) ライデン市、オランダ

日程：2008年6月29日～7月6日

経過：

6月29日

関西空港発 KLM0868便にてスキポール空港着；16：20 アムステルダムへ移動後、市内を散策

6月30日

午前；アムステルダム国立博物館 (RIJKS Museum Amsterdam) を見学。

午後；メルクウイグ (Melkweg) —ミルク工場、砂糖工場の遺構ビルを利用して作られた文化施設—を訪問、インタビュー調査。その後、ライデンへ移動。夕刻、18：30より今回の国際会議コーディネーター、アンリ・ブーケンブルグ (Henri Braakenburg) 氏とニウ・ミニバ (Nieuw Mineva) ホテルで待ち合わせの後、打ち合わせを兼ねながらライデン市内 (計量所跡、フィシュ・マーケット跡、見張台跡、ライデン大学開学当初の館、ナーシング・ホームなど) を散策。その後、歓迎夕食会に参加。(この時期のオランダでは、日が落ちるのが22時ごろと遅い。)

7月1日

アーツ・アンド・クラフツ運動史 国際会議

第一日目

於；ライデン・フォルクスハウス (写真5)

午前；趣旨説明、参加者の紹介、発表—レクチャー

午後；チャーター・バスにてアムステルダムへ。20世紀初頭、アムステルダム派の建築家ミヘル・デ・クレルク (Michel de Klerk) の建てた公共集合住宅 (Social House)、ヘット・スキップ (Het Schip) 及び同じくアムステルダム派の建築物ヘット・セラード (Het Sieraad) —現在は、文化センター、芸術家のアトリエ、舞台芸術学校などがある—を見学。ライデンへ戻る。

7月2日

セツルメント運動史国際会議 第一日
於；ライデン・フォルクスハウス

(会議前に一人で市内を散策、画家レン
ブランドの生誕地を訪問。)

午前；発表―レクチャー、会場となった
ライデン・フォルクスハウスの運営と実
態についての説明、及び、次回の国際会
議が横浜で開催されることが公表される。
午後；電車でハーグ市内へ。駅近くのオ
レンジ・スクエア (Orange Square) と
呼ばれているスラム街に到着。その地区
の管理をしている慈善団体事務所を訪問。
ハーグ市役所から派遣された職員よりこ
の地区の現状と市による都市改造計画に
ついて聴講後、慈善団体管理者、及び市
職員の引率のもとでツアーがなされる。
芸術家や建築家がこの計画に関わってい
る様が紹介される。解散後、市内中心部
で夕食をとりながら今回の会議の意義や
問題点などについて議論。今回の会議内
容を冊子にしたいとの意見が出て賛同さ
れ、編集委員にコロンビア大学教授、ル
ド・ヴァンダーイン (Prof. Ruud Van
der Veen) 氏、及び、ベルギーのバ
ン・ゼン大学教授、ウアック・デ・ドゥ
ルー (Universiteit van Gent, Prof. Luc
De Droogh) 氏に決まった。(このツア
ーの参加者は、9名。)

7月3日

今回の国際会議コーディネーター、アン
リ・ブーケンブルグ氏の案内でロッテル
ダムを訪問。

午前；ロッテルダム港を船によりツアー。
午後；ボイマンス・ファン・ペーニンゲ
ン美術館とオランダ建築美術館を訪問。

7月4日

午前；一人でハーグ市内、マウリッツハ
イム美術館を見学。

午後；アムステルダムへ移動の後、ゴッ
ホ美術館を見学。(金曜日で22時まで開
館)

7月5日

午前；教会跡が文化施設になった例、
“パラディソ (PARADISO)”、及び、
刑務所跡が文化施設として利用されてい
る例、“デ・バリエ (DE BALIE)”を
訪問、インタビュー調査をする。

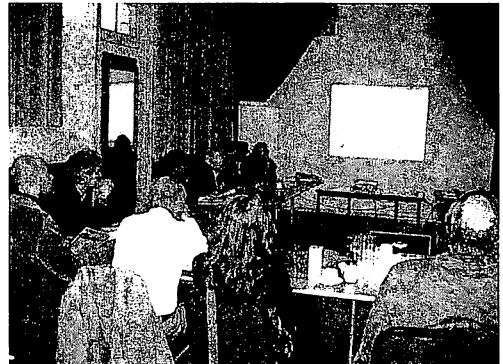
午後；スキポール空港へ移動。15：20離
陸、関西空港へ。

7月6日

午前；9：40 関西空港着 (帰国)

研究・調査・発表等の概要：

今回の国際会議は、この会議創設の発起
人、大阪大学大学院教授藤田治彦氏、ロ
ンドンのトインビー・ホール館長、ルー
ク・ゲーガン氏、及び、シカゴ、ジェー
ン・アダムス・ハルハウス博物館前館長、
ベグ・ストローベル氏のうち、出席が藤
田氏のみでさみしいものがあつた。しか
しながら、オランダ、ベルギー地区の出



(写真5) 会議風景；ライデン・フォルクスハウ
スにて

席者と発表者が多数参加してこの地区に関係した議論が活発に行われたために、このネーデルランド地方に関する多くの情報を得ることができた。内容は、19世紀末から20世紀初頭のアーツ&クラフツ運動やセツルメント運動がオランダやベルギーに与えた影響に始まり、現代に通じる運動の影響についてであった。この地域では、アムステルダム派の建築に特徴があり、建築を中心とした発表が目立っていた。

私自身、今回のオランダ訪問では、国際会議参加による成果のほかに、以下に挙げる二つの事柄を目的としたが、予定した成果をあげることができた。

- (1) 過去の産業遺構、施設などの文化施設への転用状況を調査。
- (2) 17世紀オランダ黄金期になぜ500万枚もの多数の絵画が制作されたのか、その社会的背景（庶民の絵画熱、パトロネージ、経済など）について

V. 終わりに

今日、社会の第三セクターとしてのNPO（Non Profit Organization）の役割、企業の社会的責任について考察して実行しようとするCSR（Cooperate Social Responsibility）、社会変革と収益事業を両立させて起業しようとするソーシャル・アントレプレナー（Social Entrepreneur）など社会をより良くするための様々な方策が試みられている。この中には、バングラデッシュのグラミン銀行の事例や文化芸術を支援する企業のメセナ活動、社会の中でのアートのより良いあり方を考察して実行しようとするアート・マネージメントなども含めることができよう。19世紀末から20世紀初頭の工業化社会の到来による社会矛盾の解決策としてアーツ・アンド・クラフツ運動やセツルメント運動が発祥したとすれば、前述のNPO、CSR、ソーシャル・

アントレプレナーシップ、企業メセナ、アート・マネージメントなどは脱工業化社会の到来とともに発生した社会矛盾を解決する新しい社会改革の方法であると考えられる。その意味でも、この19世紀末から展開された二つの運動を検証して考察することは現代を知る上で意義深いと考える。

最後になったが、アーツ・アンド・クラフツ運動やセツルメント運動の研究者でもないアーティストの私を会議の参加者として快く受け入れて下さった大阪大学大学院教授藤田治彦氏をはじめ、トインビー・ホール館長ルーク・ゲーガン氏ほか多くの方々に心より感謝の意を表したい。また、この報告書作成にあたり、氏名、地名などで、発音に関して不確実のためカタカナ表記を差し控えたところがある。標記に関して不十分なところがあることをお許しいただければ幸いである。また、参考資料にある発表レジュメに関しては、京都文教大学教授E. A. キング氏及びG. C. カズンス氏に多大の援助を頂いた。この場を借りて謝意を表したい。

参考資料

以下は、第7回アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議（ホテル・クムルス・オリンピア内にあるセツルメント事務所の会議室）で行った私の研究発表レジュメである。

Contemporary Art in the Countryside of Japan A Case Study of the Echigo-Tsumari Art Triennial

Toshio Mori
Kyoto Bunkyo University

The Echigo-Tsumari Art Triennial is a contemporary art festival created through cooperation of local governments, the local people of the area, art directors, artists, and volunteers. Echigo-Tsumari County is centrally located in Japan amongst the mountains of Niigata pre-

fecture, and is made up of six small towns and villages which have never been related to contemporary art in the past. The festival initially started in 2000 and now takes place for about two months during summertime every three years. The Echigo-Tsumari County area has long been one of the major sources of Japanese Kimono manufacturing, called "Echigo Chijimi." As the Kimono industry is in decline now, this area is rapidly losing its population. This event was planned in order to help revitalize this area.

The reason I selected this art festival as a case study for this conference is that the festival has been extraordinarily beneficial to the local inhabitants' wellbeing, and has helped restore people's pride of living in such depopulating regions.

We now have many art exhibitions or art festivals named 'Triennial' or 'Biennale', but most of them are for promoting contemporary art or for international exchange. The Echigo-Tsumari Art Triennial is not one of them. It was designed specifically for local revitalization.

This may well be the first art festival of its kind in Japan, linked to local revitalization efforts. It encompasses a wide geographical region including an impressive landscape with a rich variety of villages, terraced rice paddles, forests, rivers, and fields. A scene with such beauty is often used in traditional Japanese painting. The festival has opened up non-urban possibilities, despite the urban origins of contemporary art. Since ancient times, the "arts," especially the "fine arts," have been supported by the wealthy and by authorities who used to live in cities, and their style has developed around the wellbeing of these populations. This contemporary art festival, however, took place for the purpose of the rural people's wellbeing and for reactivating these areas.

As for the cost, 2.3 billion yen was spent to achieve this event. It is the enormous geographical scale and costs being totally different from other art triennials, which is at the heart of this particular regional revitalization project.

This project was decided on, undertaken, and

achieved by the efforts of the prefectural governor of Niigata and mayors from the six municipalities of the Echigo-Tsumari region. In addition, the town officers worked in cooperation to achieve the goal.

Approximately 150 artists participated and 30 of them were from outside Japan, including the U.S.A, Great Britain, France, Germany, Bulgaria, India, Thailand, Iran, Argentina and other countries.

The natural and beautiful landscapes have inspired artists' flexibility and artistic creativity. In addition, the fascinations of this region for the participating artists helped produce their sophisticated works. It seemed that the more closely the works were linked to the sites, the deeper the impression of the spectators.

Many of the artists stayed there for a long period to set their works, or even to produce their work at the sites they chose. Residents of this area have cooperated in many ways to help produce the works of art for the festival. Participation in creating the works of art gave them the opportunity to think about what the arts actually are. Thus, people were liberated from being mere spectators, telling other residents "I don't know what the arts are, but it was very enjoyable."

The organization of participating volunteers, called "Kohebitai," was mostly comprised of university students living in metropolitan areas. The chief director of this festival was Mr. Furamu Kitagawa, who is the director of Art Front Gallery in Tokyo.

As a result of the efforts of these many groups, more than 160,000 people visited the Echigo-Tsumari region which had suffered depopulation. Many of them were from urban areas.

Expenditure was about 2.3 billion yen, while the economic effect was estimated at about 12.3 billion yen.

Moreover, 94% of Echigo-Tsumari area residents viewed the works of art in the Triennial, and 4 % of those or 3,000 residents cooperated in producing the art works and participated in the workshops. A vast number of residents were willing to contribute to this event.

When I visited this area during the Triennial,

an elderly woman, master of a Japanese-style inn, excitedly explained to me about her Triennial experience taking care of young students from large cities. I found that several bonds of friendship united rural residents and urban residents through the Triennial.

This art Triennial was an experiment on all points. It is believed that this great experiment in revitalizing the Echigo-Tsumari region and building awareness by attracting visitors to the art festival was a success by any measure. It attracted participation by artists, the cooperation of local residents, and the voluntary work of urban residents.

The concept of "fine arts" originated in the West. It was imported to Japan around the 1870's, about 140 years ago when we were forced to open our ports to western countries. Before then, Japanese society and culture had been primarily influenced by China and Korea. The iconoclastic movement against Buddhism, or so-called "Haibutsu Kishaku" which is equivalent to that of Christianity in Europe in the 16th century had eliminated East Asian influences at that time. During this period, there was also a significant movement for the government to westernize Japan, the aim being plans for enriching the nation and building up its defenses.

The western style fine arts became one of the symbols of the westernization of Japan, although interests in the fine arts might have been specifically for the higher classes. The fine arts have existed far from common people's daily lives and generally speaking, this attitude toward western style fine arts continued in Japanese society even after World War II.

The movements of Modern Art in the United States influenced Japan after World War II, while the European influence, especially from France, existed before World War II. These kinds of avant-garde art existed in restrictive circumstances and were supported by a limited number of people.

The situation for fine arts in Japan gradually changed during the 1980's. After Japan's rapid economic growth during the 1970's, people's interests moved from economic matters to

mental or aesthetic satisfactions and fine arts became the target of people's interest.

Under these circumstances, a construction rush for new public galleries and art museums was carried out. The Association for Corporate Support of the Arts was founded in 1990 by private corporations as Japan's first non-profit association devoted to promoting corporate support for the arts. The Japan Association for Cultural Economics was inaugurated in 1992 and The Japan Association for Arts Management in 1998. The Law to Promote Arts and Culture was enacted in 2001.

We knew from this event that the power of creativity in the art world brings out the potential of the region, not only in the cities but in rural depopulated areas as well. Now we find that this kind of relationship between the arts and society is increasingly important in the post-industrial society. These tides prove that the use of contemporary art in promoting the people's wellbeing is a worthy project.

Bibliography

Echigo-Tsumari Art Triennial 2000 Executive Committee, *The catalogue of Echigo-Tsumari Art Triennial 2000*, (2001).

Echigo-Tsumari Art Triennial Executive Committee, *The guide book of Echigo-Tsumari Art Triennial 2003*, (Hakushindo Printing Co. Ltd. 2003).

Tokyo National Museum, Osaka Municipal Museum of Art, Nagoya City Museum, *Arts of East and West from World Expositions* (Toppan Printing Co. Ltd. 2004).

参考文献

Katherine Bradley *Bringing People Together: Bede House in Bermondsey and Rotherhithe 1938-2003*

Margrit Broham, *The catalogue of 'The light comes from the North-Art Nouveau in Finland'* (Margrit Broham Museum, 2002)

Osaka University Center for the Study of Communication Design, Design History Forum *international conference ART & WELFARE 2006*

関東学院大学人間学研究所所報 創刊号 pp.16-19

第五回国際デザイン史フォーラム『国際フォーラム「工芸運動と芸術の近代」論文集』(株)ケーエスアイ 2007年3月

デザイン史フォーラムほか編『公州2006「芸術と福祉」国際会議集』(株)ケーエスアイ2006年10月
 ダーティントン・ホール・トラスト&ピーター・コックス編 藤田治彦監訳・解説『ダーティントン国際工芸家会議報告書—陶芸と染色：1952年—』

デザイン史フォーラム編『倉敷2005「芸術と福祉」国際会議 第5回アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議 第2回セツルメント運動史国際会議』

ABSTRACT

A Report from the participation of The International Conference on the History of the Arts & Crafts Movement and The International Conference on the History of the Settlement Movement

Toshio MORI

This is a report of the International Conference on the History of the Arts & Crafts Movement and the International Conference on the History of the Settlement Movement held in England in 2004, Finland in 2007 and the Netherlands in 2008.

These conferences were held under the auspices of Osaka University in Japan, Toynbee Hall in Britain and Jane Addams' Hull-House Museum in the U.S.A.

The Arts & Crafts Movement started in Britain during the second half of the 19th century and it influenced similar groups existing in Europe, North America, India, East Asia and elsewhere. Inspired by the writings of John Ruskin, it aimed to revive the spirit and the quality of medieval handicraft. Its best-known practitioner was William Morris.

The Settlement Movement started in London in the late 19th century. Toynbee Hall was founded in the East End, London, by Samuel and Henrietta Barnett, and named in memory of their friend and fellow reformer, Oxford historian Arnold Toynbee. It became the model for settlement houses throughout England. Increasingly related to urban poverty, settlement houses offered social services to impoverished citizens. Universities settled students in slum areas to live and work with local people. They established education and savings services, as well as sports and arts programs.

In the United States, one of the largest and most influential settlement houses was Hull House in Chicago, founded by Jane Addams and Ellen Gates Starr in 1889.

At first glance, it appears that these two movements do not seem to mesh at all; however, both were born out of the social changes brought about by industrialization. The Arts & Crafts movement in Britain was essentially opposed to industrialization, so it was not only an art movement but also a social movement. The Settlement Movement was the movement for fighting poverty which appeared surrounding the urban area of the industrial revolution. We find similarity in both movements, and in fact, they sometimes corroborated their works.

Nowadays, under the circumstances of post-industrialization, there are several social movements for developing our contemporary society. CSR (Cooperate Social Responsibility) including the Mecenat activities by corporations, and Social Entrepreneurship are in the spotlight. However, it is also surely of significant to explore the social movements of the past.